

## 2019年度 手書き実技 第2問(文字起こし)

「五感の哲学」という本の著者の加藤博子でございます。今日はこの本の内容、その中での1つの感覚を中心にお話ししようと思いますが、まずはこの本を書いた動機。この本では何を明らかにしようとしているのか、ということをお話ししようと思っております。この本の「五感の哲学」、そこには副題がついています。～人生を豊かに生き切るために～となっております。所詮、寿命があって死んでいく私たちでございますが、その最期のときまで幸せしているにはどうしたらいいのか。それを感覚をとおして、それも単に気持ちよく死んでいくだけではなくて、知的に充実した生き方をして満足して死んでいくにはどうしたらいいのか、ということをお話ししようと思っております。

というのも、現在は幸せなことにとっても便利で合理的な生活をさせてもらっています。で、そういう現代生活の中で非常に快適なんですけど、それゆえに何か私たちは本来体がもっていた感覚を失っている面もあるわけです。何か大切な機能が前の代、父母の世代とか、おじいさんおばあさんの世代に比べたら、鈍くなっていたり、もうすっかり衰えている。そういう感覚もあるんですね。そのあたりをよく思い出してみても、そして身体感覚というのはそもそも持っていたはずなので、それを呼び覚まして、よりこの世界の意味をとらえて、この世界の幸せを味わい尽くしてあの世にいこうじゃないか。そういう本になっております。ただ感覚を研ぎ澄ましてということをお話ししましたが、それはただひたすら

鋭敏にすればいいということではなく、もしかしたらちょっと感じるが多すぎて情報過多になってしまって、そういう面で鈍くなっているというよりは、何かつらい状況になっているようなこともあります。それを考えると、ただただ敏感に感じるというよりも、逆に何か閉じて、感覚を閉じて、何か休ませて鈍くしてしまうことのほうが、本来の身体に沿っていることかもしれないですね。そのあたりを多角的に考えてみよう。それは実感を伴って考察するとともに、もう1つ大事な視点としては歴史に学ぶということです。文化史をよく見て、本来これはどういう意味であったのか。昔の人がそういうことをしていたのはどうしてなのか。感覚を軸に考えてみようと思った。というのがこの本を書くきっかけであり、最終的にはそれを明らかにしようと思って、この本を書きました。

で、実は1章が味覚から始まっています。普通、この五感の哲学と称しているように、哲学の書でもあるのですが、論理的な硬い哲学の本は、たいていは視覚から始まっているんですね。というのも視覚とかあるいは聴覚というのは、結局は論理的に説明しやすいし、それに我々テクノロジーもここ100年、200年の間に聴覚視覚に特化して非常に発達してきたわけです。ですから、それらについての考察というのは、非常に論理的な言葉にあっているんで、そちらの方が論じやすいのですが、あえて、味覚、そして次は嗅覚、そしてちょうど真ん中に触覚というですね、なかなか電波に乗らない、あるいは機械化することが難しい。そういう分野を書き初めにもってきてみました。つまり自分の実感を伴ったところから、この考察を始めてみたかったからです。

今日お話しするのは、ちょうど真ん中においた触覚をご説明してみましょう。触覚、触るということは、五感の秘境と呼ばれています。「ひきょう」とは卑怯者の卑怯ではなく、探検の難しい奥まったところ、なかなか表現するのは難しい。それにあまりにも複雑な機構で科学的に説明しようとする、理論的には表現しにくい。総数値化しにくい。そういう感覚なんですね。それに胎児、赤ちゃんのことを考えていただくと、そのときまだ目も見えません。音もまあ聞こえているかもしれませんが、そんなにまだお腹の中にいるのではっきり聞いているわけではないし。ただ触覚、お母さんの温もりとか、羊水の中に浮かんでるときのその感じというのは一応触覚と呼びうるわけで、一番根本的でプリミティブな感覚なんですね。